

2021 年降誕節第八主日 (2/14) 礼拝説教

「復活の子として生きる」ルカ福音書第 20 章 27 節から 40 節

【聖書】

ルカによる福音書 20:27 さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。28 「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。29 ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。30 次男、31 三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。32 最後にその女も死にました。33 すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」

34 イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、35 次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。36 この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。37 死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。38 神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

39 そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。

40 彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。

1 組織委員会長発言

東京オリンピック・パラリンピック組織委員会森会長が、誤った発言のために辞任しました。似たような言葉を耳にタコができる程聞いてきた多くの日本女性は、今まで「いちいち目くじら立てても仕方ない」と諦めて受け流してきました。私もその一人でした。ですから、欧米からだけでなく日本内部からも、それも女性だけでなく男性も含めた多くの人々が、非常識な発言に No と声をあげ、その結果、辞任へと追い込んだ事に驚き、日本にも新しい時代が来ているのだ、と嬉しく思いました。

では、聖書はこの世の男性と女性の間にある支配・被支配という関係をどう捉えているのでしょうか。とても面白い箇所があります。創世記第三章です。神様の似姿に造られた人間。神様に極めて良いと喜ばれた男と女とこの世界。神様は、人が神を神として生きることができるよう、一つの掟を与えました。「楽園にあるあらゆる木の実を食べていい、ただ、園の中央にある善悪を知る木の実を食べてはいけない。」それは神がご自身と人間の間にかかれた境界線でした。「ここまではいい、しかし、これ以上はダメだ」と、人間が神を神として

生きる為の境界線です。しかし、人間はこの境界線が守れません。誘惑する蛇の甘い言葉に負け、自分たちが神になりたいと願い、女と男は掟を破り、善悪を知る木から実を食べてしまいます。そうして、神様の前に出る事ができなくなります。神は「どこにいるのだ」と二人を呼び求めて下さいますが、二人はこの呼びかけに素直に応える事ができない、率直に罪を認めて謝ることもできません。神に「木の実を食べたのか」と問われても、男は女と女を造った神のせいにし、女は、蛇と蛇を造った神のせいにするばかり。そんな男と女に、神様はこれからの二人のあり方を宣言します。女エバに対して言います。「お前のはらみの苦しみを大きなものにする。お前は苦しんで子を産む。お前は男を求め、彼はお前を支配する」。男に対しては、「お前は生涯、食べ物を得ようと苦しむ。お前は顔に汗を流してパンを得る。土に返るときまで。お前がそこから取られた土に。塵に過ぎないお前は塵に返る。」つまり、男と女が神になろうとして罪を犯した結果、男女の間に支配、非支配の関係が生まれ、男も女も生きることに苦しまねばならなくなった、と聖書は語るのです。神に造られた本来の姿、神の似姿同士として、お互いにかけてがえのないものと尊び合うようにと、神によって結び合わされた男と女。しかし、人間は神を神とできず、自分たちが神となろうとした、そうして、人間同士お互いに信頼して生きることができなくなった、人間の間関係は、力で支配する側と支配される側があるいびつな関係となった、と聖書は物語っています。この最初の男女の物語には、自分たちの生きる社会の中での男と女の支配・被支配のあり方を、人間の罪の結果だ、という視点で見つめています。人間社会の秩序とは、その結果を前提としたものであり、神の国の秩序、制度とは根本的に異なるものだ、と聖書は語っているのだと思います。

ですが、私達人間は、全く逆の考え方をします。この世の制度、この世の現実を絶対視し、そこから考え始めます。女性は男性に支配されているのだから、男性よりも劣った者であり、さげすんでいいのだ、欲望の対象としてよいのだ、自分たちの持ち物として好きなようにしてよい、と考えてしまう。しかし、だからと言って、男性だけが特別罪深いわけではありません。女性が支配する側にまわれば、弱い人たちに似たような事をするのは歴史が証明しています。

この世の制度、秩序は、力の強い者達、支配する側が作り上げるもの。男性と女性なら、男性に、金持ちと貧乏人なら、金持ちに都合よくつくられていきます。ですから、人間社会で力を持つほどに人々は、現状をよしとし、変革を嫌い保守的になる、と言ってよいと思います。勿論、全員ではありませんが。

## 2 サドカイ派

今日の聖書の箇所に出てくるサドカイ派の人々も支配する側だったようです。

彼らは、書き物を残していないので、実態が不明なことが多いようです。しかし、エルサレム神殿の高級祭司達やユダヤ貴族を中心にした人々、ローマ支配を受け入れ、豊かな生活を送っていた人々であり、ユダヤ社会の支配層であったことは確かなようです。彼らは、聖書のうちでも創世記、出エジプト、レビ記、民数記、申命記だけいわゆるモーセ五書だけを信じていたそうです。一方、ファリサイ派の人々には、貧しい人々も多くローマ支配もよく思っていないで、預言書や詩篇などの聖書の他、聖書の教えを生活上で実践していく具体的な規則や口伝えで伝えられたことも大切にしていたそうです。サドカイ派は、そんなファリサイ派の人々と対立し、論争を繰り返していました。彼らの論争のテーマとなっていたものに、「死者の甦り」があります。ユダヤ教の中に「死者の甦り」が現れる時代は、かなり後、バビロン捕囚が終わる頃で、ダニエル書の12章などが最初であるというのが通説です。サドカイ派が信じていたモーセ五書には、直接的に「死者の甦り」の記述は出てきません。そのため、サドカイ派の人々は、「死者の甦りなどない」として、これを信じるファリサイ派の人々と激しく議論していました。

サドカイ派の人々は、主イエスも死者の甦りを信じていると聞いて、議論をふっかけてきました。今日の質問の背景には、レビラト婚という制度があります。旧約聖書の申命記にその規定が描かれていますが、中近東では広く行われていた風習のようです。「兄が跡取りの男の子がないままに死んだら、弟が兄嫁と結婚して男の子をもうけ、兄の名を残さねばならない」というものです。女性は一前扱いはされない古代社会にあって未亡人の生活を保証するという意味もあったでしょうし、自分達の家や財産、特に土地がよその者達に奪われないようにする意図があったとも言われています。

しかし、男であれ女であれ人間は子を産む機械ではありません。本当にこんな質問通りの事があったとしたら、これほどの悲劇はないでしょう。次々と夫が死んでいくこの女性の気持ち、子供や兄弟をなくす家族の気持ち、心が潰れ、自分を呪ってしまう絶望を味わうであろう事は、容易に想像できます。ですが、サドカイ派の人々は、そんな事は考えもしない。彼らがふっかけたのは、議論の為の議論である事は誰の目にも明らかです。相手を言い負かすことに夢中になると、まるで人間の命を算数の問題のりんごやみかんのようになんげで引き算するようなことまで考えてしまうのは、誰にでもあることかもしれません。実は今日の設定は、サドカイ派の人々がファリサイ派との討論でよく使うものだったようで、ファリサイ派のラビ達も模範解答を考えていたようです。彼ら考えた模範解答は、「まず、蘇った長男からこの女を妻にしたいか？と聞いていく、長男が『私の妻にしたい』といえ、この女は長男の妻となる。『私の妻でない』といえ、次男に聞いていく、これを繰り返す」というもの。結局、ファリサイ

イ派の人々も、サドカイ派の人々も、死者が蘇る次の世は、この世の続きである、私達の罪を前提として作り上げられた社会の延長線上にあると考えていることがよく判ります。

なんと陳腐な事か。なんと退屈な事か！と思います。神のご支配が完全に現れる次の世がそんな陳腐なわけではないのに。ですが、私達は、彼らと全く同じふうに考えます。人間の罪あるこの世の事から始めて、神のことを考えてしまいます。それは全く逆、倒錯した状態なのに、それに気づかない。本来は、神のことから人間の事を考えねばなりません。だから、神はどのようなお方かを知る事が大切になってきます。しかし、誰よりも神をご存知の主イエスは、私達とは違います。

### 3 復活の子

主イエスは、次のように答えられます。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。」「死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々」とあるように、次の世とは、人間の造った罪の世が神の審きを経て、完全に全く新しい世界に作り変えられると主は仰っています。人間の罪が取り除かれ、神のご支配が完全に現れる世界だということです。神の審きを経て清くされた人々は、もはや死ぬことはありません。だから、「娶り」「嫁いで」子供を産んで肉体の命を繋げる必要もないのです。

その新しい世に生きる者達は、「**天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。**」と主イエスはおっしゃいます。天使のようになる、神を賛美し神の栄光を表し、神の為に働いて喜び生きる者となるのです。そして「復活にあずかる者」と訳されているギリシャ語を直訳しますと、「復活の子」です。なんと素敵な言葉でしょうか。子供は親のものを受け継ぎます、子供は親のものにあずかる者。次の新しい世、神の完全なる支配のうちに生きる者は、父なる神の永遠の命にあずかる復活の子、父なる神から、甦りの命を頂く神の子だ、と主はおっしゃるのです。

主は、この「復活の子」を別の言葉で言い表しておられます。出エジプトの柴の箇所から、主なる神の呼び名が「**アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神**」であることを紹介した後です。「**神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。**」との言葉です。この「**すべての人は、神によって生きる**」という部分は、「神に向かって生きる」というのが直訳であり、「神に対して生きる」と訳せる言葉で、そのように翻訳している聖書もあります。

#### 4 主の十字架と甦り

冒頭でも申し上げた事を繰り返します。本来、人間というものは、神とあい対して生きる者として造られました。ですが、人間は自分達が神となりたいと欲し、神との関係が壊れ、神とあい対して生きることができなくなり、人間同士も完全な信頼関係に生きることができなくなります。そうして、支配、被支配を含む関係が前提として社会がつくられていった、と聖書は語ります。罪が入り込んだ関係を前提にある世界で私達は生きているのです。私達はみな、神のみ前に出る事ができない。自然のまま、ありのまま、新しい世に「復活の子」の命を生きる事ができる人間は、一人もいないのです。ですが、天の御神は、次の世には、すべての人がご自身の前に生きる者となって欲しい、この世の命だけで滅んでしまう事は耐えられない、と強く私達の救いを願い、主イエスをお送りくださいました。主イエスは、十字架に赴かれます。そして完全に死んで葬られ、三日目に甦らされます。

この主の十字架と復活を、使徒パウロはローマ書6：10～11で次のように語ります。「キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」キリスト・イエス、ご自身は罪なき人であったのに、「罪に対して死なれた」、ご自身の存在を賭けて私達人間の罪と向き合ってくださいました、その結果、神なき十字架という絶望に、罪の行き着く果ての「死の中の死」に呑み込まれて亡くなりました。私達が受けるべき死を、主が引き受けてくださいました。そうして、三日目に甦らされたのです。「神に対する」命に、永遠の命に甦られました。罪ある私達の罪が赦され、復活の子となる道を開く為でありました。ファリサイ派やサドカイ派の人々は、罪ある人間のままの命への復活を考えていた、いわばゾンビのような蘇生とっていいと思います。ですが、主イエスの復活の命は、そうではありません。全く新しい命、神の子の命です。万物の造り主である神との密接な関係に生きる、神に対して復活の子となる命です。天の御神は、主なるイエス・キリストは、それほどまでに、私達一人一人を代わりのいない尊い存在だと考えてくださっているのです。

#### 5 究極の一步手前

では、私達はどうしたらいいのでしょうか。主イエス・キリストが十字架にかかって罪を清算し、甦ってくださいましたのだから、私達はただイエス様を救い主、キリストと信じていれば、何もしなくていいのでしょうか。罪の世界で、

相変わらず自分たちを神として生き続けなければならないのでしょうか。

主イエスはそうはおっしゃってはいません。主イエスは、十字架の死から甦り弟子たちを教え導いた後、父なる神のもとに昇る直前に愛する弟子たちにおっしゃいます。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」(使徒1：8) 主イエスの証人として生きるということは、この罪の世にあって、神の支配の内に生きるということです。言葉だけでなく生き方でなければ主イエスの証にはなりません。だから、私達だけの力では到底、主イエスの証人として生きることは不可能です。ですから、聖霊がきてくださる、それを受ければ、イエス・キリストの証人としてこの世を生きていくことができる、そして、次の世に完全に与えられる復活の子の命を、この人の罪の世界にあって既に先取りして生きる、と主ご自身が弟子たちに、私達に、約束してくださっています。主はこうおっしゃっているようです。「聖霊によってこの世を復活の子として生きよ、そして、この私の証人となれ、人の罪が支配しているような獣的な欲望の世界にあって、天の御神の支配に生きる喜びを宣べ伝えよ、罪を押し流す神の義と愛を宣べ伝えよ。」

そんなこの罪の世を、復活の子の魁として生きることを、ドイツの神学者・ボンヘッファーは次のように言いました。「究極を見上げつつ、究極の一步手前を目指して生きる。」完全なる神のご支配、次の世は、私達人間がもたらせるものではありません。天の御神がもたらすものです。しかし、私達は、究極の一步手前、みな復活の子の魁として生きる事、お互いが罪ある者であると認め、神のみ前に悔い改めつつ、少しでもお互いを尊い者として生きる事ができる世界を目指していく事ができます。主イエスが目指せるようにしてくださいました。

今回のオリンピック・パラリンピック組織委員会会長の発言を糾すことにおいても、私達、相手の人格否定までしてしまうという罪を犯します。私達はみな自分たちが神となり、異なる考えの人を容易に裁く傾向のある者達だし、そんな者達が作り上げている世界に生きています。罪あるこの世界で復活の子の命を生きる為には、絶えず聖霊の導きを求める事が必要となります。

見えないイエス・キリスト、私達に先立って甦ってくださった見えないイエス様により頼み、このお方に従って生きることで初めて、究極の一步手前を目指して行く事ができるのだと思います。そして、私達は、次の世では、究極の喜び、復活の子として生きる喜びにあずかるのです。喜びから喜びへの道を、命から命への道を備えてくださる父なる御神を賛美せずにはおられません。